

# インテグリティ教育

－ アタッチメント・コーチングのすすめ －

**豊田 則成**

(びわこ成蹊スポーツ大学)

1

## スポーツ指導場面における暴言暴力

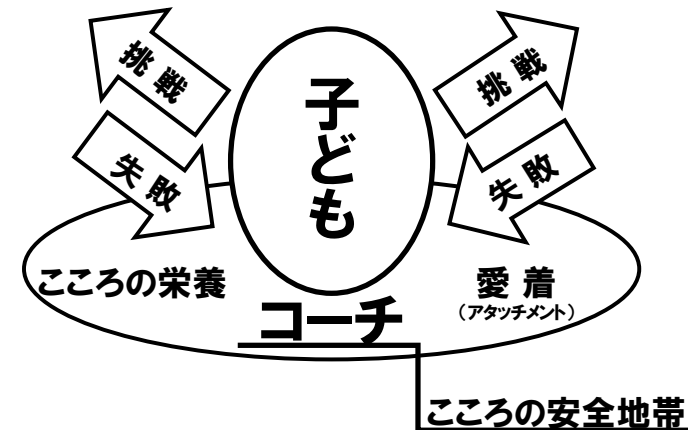
- Human Rights Watch(2020)や 土井ら(2021)は、暴言暴力の実態を明らかにし、法的規制を念頭において議論 → 相談窓口
- 人は誰でも「暴力性」を有しており、その有形行使として「暴力」が立ち現れる(松田,2019)。
- 根絶には程遠い→根絶を目指した議論を風化させない→継続して議論することが必要(内田, 2015; 南部, 2019; ミラー,2021, 上野, 2020)。

2

## 愛着(アタッチメント)に着目して

- ジョン・ボウルビー(1951)
- 子どもは養育者等との親密な関係性の仕組みによってもたらされる安心感に支えられて外界の活動を安定させ円滑な対人関係を構築する。
- 「安全な避難所」「安全な基地」  
→ 『心の安全地帯』
- 子どもにとってコーチは「愛着」の対象である。

3



4

## 議論を続けるための視点

- 『スポーツ指導場面において受けた暴言暴力はどのような影響を及ぼすのか』という素朴な疑問を持ちつつ、事例に注目する
- 『なぜ、そうならざるを得ないのかな？』
- 『なるほど、そうならざるを得ないよね！』
- 『だったら、こうすればいいのでは？』

5

- 事例Aくん：男子 年齢不詳
- 分析の焦点 『スポーツ指導場面において暴言暴力を受けたことにより大きな心理的ダメージを受けた経験を有する大学生』
- 語りの中に登場する①コーチ、②両親、③仲間・友人、についての語りから社会的相互作用(心のやりとり)に着目してみよう

6

### Aくんの概要

今でも、どのカテゴリーにおいても暴言暴力は「常態化」している。Aくんは暴言暴力を受け続けた。「すべては自分が悪い」と自責の念に駆られ、「指導してもらえないのでは」と常に不安を募らせた。Aくんは腰椎分離を発症し、練習を休みがちになる。それでも尚、暴言暴力を受け続けたことから、「もういいや」と気持ちが切れた。練習にも行かず、不登校になり、脱退を選んだ。

7

### 事例(1/10)

コーチと初めて出会ったのは、小学3年の頃に「元気いいね。うちのチームに入らない？」と声をかけられた。強いチームのコーチであったことは以前から知っていたので「正直、とても嬉しかった」。しかし、実際に入ると暴言暴力は当たり前。そんな中でも「自分ではできると思っていた」。

8

事例(2/10)

「コーチから大きな声で怒鳴られて叩かれるのはミスをした自分が悪いと思っていた」でも、怒鳴られるのも叩かれるのも、ただただ怖かった。恐ろしかった。痛かったから「ものすごくショックで結構落ち込んだ」  
「コーチはいつも不機嫌だったし、今日も怒鳴られて、また叩かれるのかもしれないと思うと、常にビクビクしていた」

9

事例(3/10)

何よりコーチに「見捨てられるんじゃないか」と不安に思っていた。怒鳴られ、叩かれ続けていると「指導してもらえないかも」と不安になった。実際、コーチは「お前なんか、やめてしまえ！」「ミスばかりで、もう必要ない！」とまで言い放っていた。「僕は期待に応えられないんじゃないか」「とにかく、焦ってばかりいた」とAくんは振り返った。

10

事例(4/10)

「ミスは絶対にしちゃイケナイと思っていたけど、そう思えば思うほど、身体が固くなって、却って動きもぎこちなくなっちゃって」「このままじゃ、試合に出してもらえない」「焦るばかりで、どうすればいいのかわからなくて」「試合に出れないのは絶対に嫌だった」「だから、怒鳴られ、叩かれても我慢しなくちゃ」と思っていた。

11

事例(5/10)

「強いチームは、どこもコーチから怒鳴られながら、叩かれているのが当たり前だと思っていた」「親も同じことを言っていた」「叩かれるのは嫌だったから辞めたいとも思ったけど、実際辞める勇気がなくて」「途中で辞めることで、自分が弱いと思われたくないから」「だから、親には何も言わなかった。だって心配するから」「親には心配させたくなかった」

12

事例(6/10)

Aくんは、ある日、学校に行けなくなった。朝起きて、顔を洗うために鏡を覗いたら「自分が物凄く醜い姿に見えてしまった」のだ。何度も何度も顔を洗って、頬が赤く擦り切れて腫れ上がり、血が滲み出てもやめなかった。

母親が「何しているの。もうやめなさい」と制止しようやく踏みとどまったが涙が止まらない。「これじゃ学校に行けないよ！」と叫んだ。

13

事例(7/10)

中学の頃、父親には「そんなに他人の目を気にしなくてもいい」と諭されたことがある。母親には「本当の自分を見せないようにしているよね」と言われた。幼少の頃、祖父の家に預けられたことが多かった。「お父さんとお母さんは忙しいから仕方がない」と思った。暴言暴力が嫌で、母親に泣いてすがりついたこともあった。「もう嫌だ！もう嫌だ！」と母親にしがみ着いたことも。

14

事例(8/10)

毎回、仲間の皆が練習に向かう時の足取りが重かった。「きっと誰かが怒鳴られ、叩かれる」「今日はお前が殴られろ？」「自分じゃなければいいのに」と練習前に話すこともあった。「試合に負けようなら必ず誰かが叩かれる」「負けたら全部僕らのせい」「だから負けちゃダメだと必死だった」

15

事例(9/10)

周囲の眼差しが突き刺さる感じがした。「部活を休むなんて仲間にすごく迷惑をかけている」「自分が醜くて許せなかった」「本当の自分を隠したかった」しかも「自分の身の周りで起きていることの全てが自分のせいで、自分が悪いのだ」と強く思い込んでいた。それに加えて、「本当の自分を誰にも見せられない」と強く思っていた。

16

事例(10/10)

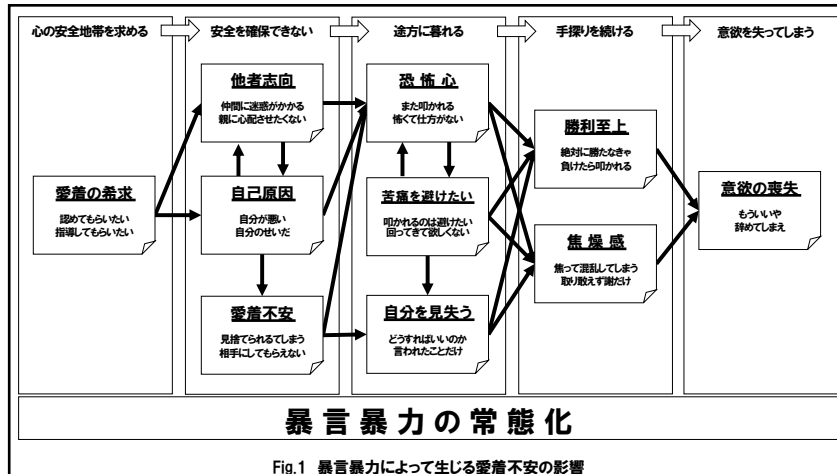
母親に車で送ってもらって、学校に到着するも、トイレに直行して、そこから出られない。「こんな自分を他の友だちに見られたくない」「休んでいることが皆に申し訳ない」「自分が情けない」と自分を責め続けた。明らかに精神的な不調が続いたので、母親と共に精神科を訪れた。「練習は休んだ方がいい」「学校も」「しばらくゆっくり過ごそう」と医師からすすめられた。

【さあ、コーチの皆さんで考えよう！】

□ この事例は『スポーツ指導場面において受けた暴言暴力はどのような影響を及ぼすのか』という素朴な疑問の下、Aくんの受けた暴言暴力の経験を人との関わりに着目している。その結果、『心の安全地帯を求めていたものの、その安全を確保できず、途方に暮れてしまい、手探りを続けるものの、意欲を失うに至ってしまった』といった深刻な影響を及ぼしていた。

- コーチに認めてもらいたい、指導してもらいたいという【愛着の希求】がベースにあった。
- しかし、暴言暴力によって【愛着不安】が激化していく。
- 【他者志向】仲間にも本当の自分を見せない、【自己原因】悪い自分だと思い込んでいた。
- 暴言暴力に対して【恐怖心】を抱き、【苦痛を避けたい】と思い続けていた。
- そのような中において【自分を見失う】ことになり、【焦燥感】を募らせていった。
- そこでは、暴言暴力を避けたいがため【勝利至上】を引き受けざるを得なかった。
- Aくんはもがき苦しみながら、結局、【意欲を喪失】してしまい、精神的破綻に陥った。

□ コーチの暴言暴力がAくんの『心の安全地帯』を崩壊させてしまった。



【暴言暴力の影響 / 愛着の観点から】

□ そもそも愛着(アタッチメント)とは、子どもと母親との関係において見出された概念である。一方、特定の重要な他者(ここではコーチ)との信頼関係を深めることは、子どもが心理的安全性(安心感)を確保することにも通じていると言える。

□ Aくんの場合、コーチによる「暴言暴力の常態化」の中で、「愛着不安(attachment anxiety)」を生じさせてしまい、「心の安全地帯」を崩壊させてしまっていた。

□ コーチから受けた暴言暴力は、当時のみならず、その後も、永くAくんを苦しめ続けてしまうことにもなっていた。

□ 本来、コーチの正常な愛着行動によって、子どもたちは、スポーツを豊かで健全な経験として将来に繋いでいくことができるのかもしれない。暴言暴力は決して許されてはならない…。